

日本個性化教育学会報 第33号

今号は、2019年3月24日（日）に行われた春季研究会について報告します。

今年度の春季研究会は、新学習指導要領実施を控えて、評価と高大接続改革を取り上げ、評価に関わる多くの疑問の解消を目指すとともに、大きなうねりとなっている高大接続改革について学ぼうという企画の元に行われました。



- ・テーマ 新学習指導要領における評価と高大接続改革
- ・期 日 2019年3月24日（日）
- ・場 所 上智大学 2号館4階 2-410教室
- ・時 程



10:00～11:10

新学習指導要領における評価 奈須正裕（上智大学）

11:20～12:30

高大接続改革の動向 山下真司（「キャリアガイダンス」編集長）

12:30～13:30 昼食

13:30～15:30

質疑応答と全体討議 司会 澤田稔（上智大学）

新学習指導要領における評価

上智大学 奈須正裕



従来は学習指導要領改訂後に別途、評価の議論を行ってきた。しかし、そもそも評価論は目標論・学力論の裏返しであり、指導と評価の一体化、カリキュラム・マネジメント等、評価論を含み込んだ形での改訂の必要性から、今回はこれを改め、「総則・評価特別部会」で一体・不可分のものとして検討を進める予定だった。しかし、この部会で議論すべき事項の多さ等から結果的に十分な議論が出来ず、今回のワーキンググループ発足となった。

学習評価改善の基本方針は以下の3点であり、総括的評価中心から形成的評価重視へという方向性、「評価はコミュニケーション」との理念が示されたことは画期的である。

- ①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ②教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

評価の観点とは、従来の4観点から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点へと整理された。3観点は資質・能力の3つの柱、学校教育法30条2項とも対応しており、すべての校種・教科等で統一的に用いられる。

「知識・技能」の評価については、知識と技能が同一観点となったことに違和感を持つ向きもあるが、かねてから心理学や認知科学では技能も知識の一種（手続き的知識）と考えるのが一般的であり、その反映と解釈できる。大切なのは、事実に知識に加え、概念的な理解、精緻化（elaboration）された知識への質の拡充であり、その評価であろう。

「思考・判断・表現」の評価については、従来の考え方と大きな変化はなく、「内容」として「思考力・判断力・表現力等」の具体が示されるようになった学習指導要領本体の改訂により、いっそうその趣旨が明確

になったと言えよう。実践的には、テスト一辺倒の評価から多様な方法による評価へという動きと共に、授業の計画・実施自体から思考・判断・表現が求められ、しっかりと現れるような様々な活動・場面を設けることが望まれる。授業が変われば、自ずと評価も変わってくるのである。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、「学びに向かう力、人間性等」のうち、観点別評価になじむ部分をカバーする。なお、なじまない部分については、個人内評価や目標にとらわれない評価を用いて、適切に評価していくことになる。

「主体的に学習に取り組む態度」については、①粘り強い取組を行おうとする側面（動機づけ的な側面）に加えて、②自己の学習を調整しようとする側面（メタ認知も含めたスキルの側面）の2次元でとらえることが新たに提起された。さらに、その教科等の特質に応じた学びのあり方と関係づけてとらえることが大切であり、評価以前に授業や教師の指導がそのような取組を求めるものとなることが重要である。また、このこととの関連で、「知識・技能」「思考、判断、表現」と相互依存関係にある、つまり「主体的に学習に取り組む態度」のみが「A」で他が「C」といった評価が不自然であるとの見解も示された。

学習の自己調整が評価の観点、つまり学力論の中に明確に位置付けられたことは画期的である。なぜなら、教師主導の一斉指導では子どもによる学習の自己調整の余地は極端に少なく、切実性も低い。したがって十分には身に付かない。自由進度学習に代表される、自由度の高い「一人学び」の学習形態の推進によって、今回の動きは朗報と言えよう。



高大接続改革の動向

～高校はどのように捉えて、どんな取り組みをしているのか～

キャリアガイダンス 編集長 山下真司

これからの子どもたちがどう生きていくのか。どのような学びが必要なのか。いま、高校を取り巻く激動の7年をどう過ごすかが問題であると多くの校長は語る。新学習指導要領は今年度より先行実施であり2022年度から実施される。大学入試共通テストは今年度実施方針が策定・公表される。そして2024年度まで現行学習指導要領で実施され、2025年度入学の子どもから新学習指導要領が実施される。

10年後には新学習指導要領で学んだ子どもが社会に出てくる。まさに、高校は教育改革の渦の中である。

高大接続改革では、その入り口である入試について考えたい。まず、入学者選抜では学力の3要素が主に問われることになる。①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性・多様性・協働性であるが、主にセンター試験に当たる大学共通テストにおいて①②を、個別の大学の選抜試験で③を見ることになる。

たとえば京都大学では、入学選抜から選考に移行されている。子ども一人ひとりの学びが評価される仕組みへの変化である。選考は、①大学入学共通テスト、②自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法、③高校時代の学習・活動歴に関する資料、④エッセイ、⑤大学入学希望理由書・学習計画書（入学後の学びの設計書）、⑥面接・ディベート・集団討論・プレゼンテーション、⑦その他による。大きな特色は、入学後の学びの設計書である。大学4年間の自分の学びをどう設計するかを問うのであり、学び続ける自己を問うのである。

次に、高校はどう動き出しているか。昨年秋の調査では、生徒に育みたい資質・能力の策定や見直しの状況では、1/3が既に策定されたものと答えた。これから策定予定が1/3、対応は未定が1/3、さらに策定する予定が無いと答えたのが1.8%という結果だった。策定予定を含めると64%の回答となる。



「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニングの視点）による授業改善への取り組みでは、9割が学校もしくは教科単位で、又は教員単位のいずれかで行われ、学校全体で組織的な対応が行われているのが5割になっている。その実態は、総合的な学習の時間の取り組みについて見てみると「学習のねらいを踏まえて取り組んでいる」が約6割で、学習のねらいを踏まえず単なる調べ学習になっているのが約4割を占めていた。また、カリキュラムの位置づけでは53%の学校が中核に位置づけ、又は、中核に位置づけたいと回答している。

ポートフォリオの導入・活用については、約7割が実施と回答していた。私立の普通科が多く、本当にあった話として「部活の部長を毎月変えている」という学校があった。これなどは受験を意識しすぎていると考えざるを得ない。何のための、誰のためのポートフォリオなのか疑ってしまう。

ポートフォリオに対する高校側の懸念としては、

・公平性が確保されていない。

- ・活用する者としいない者の格差が広がるのではないか。
- ・情報が漏洩した場合、記入した学校、教員にまで責任が問われかねない。
- ・大学側が評価をどのようにするのか明らかにしていない

などがあげられる。ポートフォリオは生徒自身が自らの歩みを確認するものであるが、今は受験のために必要だとの考え方が多い。



このような中で、お互いに歩み寄る（高校と大学）1つの事例として、甲府南高校と山梨大学の実践がある。ここでは高校と大学の互いの信頼関係を深めるため、山梨高大接続研究会を立ち上げ、大学が地元の高校生に年2～3回の継続的なプログラムを展開している。毎回ポートフォリオを通して点と点を結んでつなげ、進みたい道を自分で描けるようにしている。「キャリア・パスポート」へと発展させていく構想をもった取り組みである。

次に、総合的な探究の時間の充実については、この時間の理解の深め方がポイントであり、高校において新旧の学習指導要領の比較を行っているところが多いが、学習者の視点に立ち、さらに学校種間（小中の総合的な学習の時間）の比較を進める必要がある。

総合の実践例として興味深いのは、岩手県立大船渡高校の「大船渡学」である。これは、地域の課題を通して自分の学びたいことを探究する学びであり、地元のためでなく生徒の学びたいことを中心に進めていく。単なる調べ学習に陥ることなく、自らの学びを追究していく学習である。そのために徹底的に問いを追究する。目標を実現するためにふさわしい探究課題を重視する。探究過程で絶えず自らの問いを追究し、自己の在り方・生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していく。その中で学びの過程は高度化し、自律的に学び深める学習である。

このような学びが成立するためには、単元配列表を活用した教科横断的な取り組みが必要になってくる。さらに、教科間の連携の要として特別活動も大切である。特に、今回の特別活動の見直しでは、小中高に共通し連続してあるホームルーム（学級活動）に新設された「一人一人のキャリア形成と自己実現」に注目したい。この項目は、小・中においても新設され、キャリア・パスポートの活用が今年度から示され実施に移される。これは、単に言葉だけの接続に止まらず、小中高を通した具体的な接続と、それをもとにした大学での学びの接続性の話である。

小中高を通しての主体的な学び、それを保障するためのポートフォリオ、キャリアパスポートの位置付けが重要である。受験や就職のための学びではなく、学校での学びが将来につながっている主体的な学び、子どもたち一人ひとりにとって次につなげる学びの実現を目指していきたい。

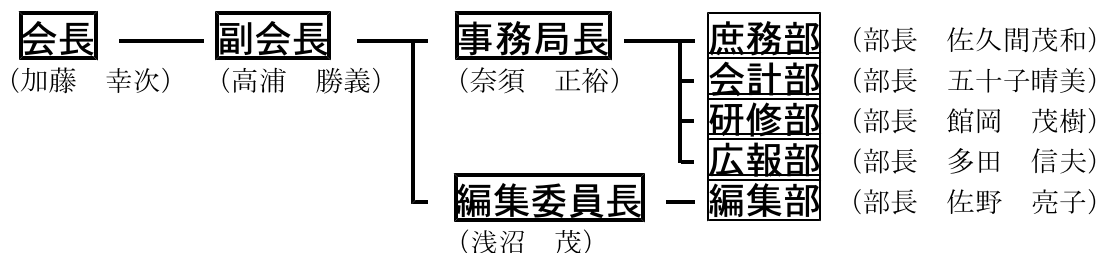
文責 埼玉 多田信夫

質疑応答と全体討議（午後）

澤田稔氏（上智大学）を司会に立て、午前中に講演した奈須正裕氏（上智大学）、山下真司氏（「キャリアガイダンス」編集長）とフロアとの間で、活発な質疑応答が行われました。



《2019年度 日本個性化教育学会組織》



《2019年度 日本個性化教育学会地域組織》

東北個性化教育学会	東海個性化教育学会
関西個性化教育学会	九州個性化教育学会

四国個性化教育学会の元会長、長尾順二先生が2019年4月27日にご逝去されました。88歳でした。長尾先生は、香川大学附属高松小学校副校長、宇多津小学校校長、宇多津町教育長などの重職を歴任され、香川県教育の発展に尽力されると共に、前身の日本個性化教育研究連盟四国個性化教育研究会時代より、一人一人の個性を大切に教育、子ども中心の教育に関わる理論的・実践的研究の重要性を説き、力強く牽引して下さいました。文化・芸術にもご造詣が深く、四国で開催された香川・高知の両大会における映画史と教育史を絡めたご講演には、多くの学会員が深い感銘を受けました。学会員一同、長年に渡ります懇切なご指導に改めて深謝申し上げますと共に、衷心より、お悔やみ申し上げます。



第12回 日本個性化教育学会全国大会（神戸大会）

開催地：兵庫県神戸市 **会場：神戸国際大学**
開催日：2019年8月10日（土）～11日（日）

※大会の詳細および申込方法については、別紙2次案内（HPにも掲載）をご覧ください。

※大会に合わせて、神戸国際大学にて教員免許更新講習を開催します。
 詳細は、別紙のご案内をご覧ください。

学会誌「個性化教育研究」への論文投稿方法の変更について
 郵送を廃止し、すべてメールでの投稿とする方向で検討中です。神戸大会の「会務総会」で決定し、HP等で周知しますので、よろしくご確認下さい。

＜事務局への問い合わせ・連絡先＞
 庶務部長 佐久間 茂和
 〒362-0064 埼玉県上尾市小敷谷 77-1 3-28-502
 Tel 080-5429-1681
 e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp
 日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第33号
 2019年5月12日発行
 編集責任者 事務局長 奈須 正裕
 編集 広報部 多田 信夫